ねこのいうれい

中島八十一

我が家に蜚蠊（ごきぶり）見えずなりぬるより十余年、蜚蠊なきは安らかなる日々には違ひなし。蜚蠊在りし砌には不快なること限りなく、見えずなりぬるは喜ばであるべしやと思へども、その見えざること常となればもはや嬉しきこともなし。稀に出づるを見るとも「蜚蠊うち出でたり」と感慨を驚くほどのこともなし。

家人の卵をせっせと集めてありとの話を聞きたるためしもなければ、蜚蠊海海（ほいほい）を大量に仕掛くるためしもなきにあらずや。以前は我が家到る處を縱横無盡に走り回るが常なれば、不可思議なること怪しむに足る。何故に蜚蠊消えたりしや。

七年前まで余の家に猫居れば、習性にて蟲を捕ふることに並々ならぬ心ありき。蜚蠊しかり、ハヘトリグモしかり。小さき蟲を見るや忽ちに人格ならぬ猫格變化（へんげ）を來たし、ついに今しがたまで眠りに入らむとするばかりなるが、途端に目をらんらんと輝かす。ハヘトリグモを狙ふ猫を指して、小學五年の孫娘に見たまへ、蟲を捕ふるぞと言へば、否、蜘蛛は蟲ならず。蟲は胸より六本の脚を出せるものなれば蜘蛛はそが條件には當たらず。學校にてさ敎はりきと。余答へて言ふに蜘蛛こそ蟲なれ。お腹の囘蟲は脚のなけれど蟲といはずや。蟲下しとも言ふ。鯨は哺乳生物なれど魚偏を使はずや。ぢぢ、屁理窟を言ふなかれ。否、屁理窟ならず。白馬は馬に非ずといはずや。我が正論に孫娘じりじりと後退す。

さりとて余は何故蜚蠊の消えたりやと考ふ。考ふれば考ふる程に餘人は呆れ果つるのみ。家人は無駄と知りつつあだなること考へずとく動けとののしる。海援隊も歌ふ　♪働け、働け、いっぺんでも休まばやと思はば、そん時や死ね♪　アランは「幸福論」に言ふ、理窟は君みづからに鉾先を向くることになる。腕の上げ下げや屈伸をやるべし。その結果に君は驚かむ。かくして哲學の師は君を體操の師に連れ行く、と。

げに蜚蠊には人にはあらぬ超能力あり、五感超え見えざるものはかばかしく察知す。七年前に死にし猫の今もここに居ることを。人の幽靈は應擧以來脚のなきことと定まれり。さすれば猫の幽靈は四本の脚さながらなしや。四つ足と言はずや。前の二本は前脚とも言ふ。なんの猫の手も借りばやといへば前の二本は手にて、靈になりて見えずなるは後ろの二本ばかりなり。手はなほ人の幽靈と同斷ならば手首曲げ出づるとぞ思はるる。孫娘逃げ行き、余の周圍よりはかくて誰もあらずなりき。

（令和六年八月二十八日受附）